

論文要旨

氏名	稗田 祐理子
タイトル	スケーリング・ルートプレーニング後の歯周ポケットの治癒は歯肉溝 滲出液中 IL-1 β の初期の減少率と関連する
論文の要旨 <p>歯肉溝滲出液 (GCF) は歯肉溝から非侵襲的に採取することができ、組織破壊酵素や炎症性サイトカインを含んでいる。歯周病患者の GCF では IL-1, TNF-α, IL-6 などの炎症性サイトカインが健常者と比較して有意に上昇していることが、これまで多くの論文で報告されてきた。しかし、GCF は極微量しか採取できないために、1つのサンプルから同時に解析できるサイトカインは数種に限定されていた。本研究では、抗体アレイメンブレンを用いて 40 種の炎症性サイトカインを測定することにより、スケーリング・ルートプレーニング (SRP) 前後における GCF 中炎症性サイトカイン発現を検討した。九州歯科大学附属病院歯周病科を受診した慢性歯周炎患者のうち研究への同意が得られた 20 名を被験者とし、前歯・小臼歯を被験歯とした。初診時に 6 点法にて歯周ポケット深さ (PPD)・プロービング後出血 (BOP) の測定を行った。また、6 点法による PPD を合計した歯周ポケット深さの総計 (TPPD) を算出した。さらに、口腔清掃指導とスケーリング後 (SRP 前 PPD) と被験歯を含む全ての残存歯に対して歯周基本治療を行った後 (SRP 後 PPD) に測定を行った。被験歯からの GCF の採取は SRP 実施当日と 7 日後に行った (SRP 前 GCF, SRP 後 GCF)。また、GCF 中のサイトカイン発現量についてはヒトサイトカイン抗体アレイ C3 キットのメンブレン上で発光したスポットを Image J にて測定した後、専用の分析ツールにより算出した。その結果、SRP により PPD と TPPD は有意に減少していた (ステューデント T 検定)。しかし、どのサイトカインの発現量も SRP により有意に変化していなかった。そこで、サイトカインの発現量の変化を以下の 3 つの計算式で評価した (SRP 前 GCF-SRP 後 GCF, SRP 後 GCF/SRP 前 GCF, Log(SRP 後 GCF/SRP 前 GCF))。また、SRP による PPD, TPPD の変化量 (ΔPPD, ΔTPPD) を被験者毎に算出した。重回帰分析の結果、SRP による TPPD の変化量 (ΔTPPD) には SRP 後 7 日間の IL-1β減少率 (SRP 後 GCF/SRP 前 GCF) が有意な影響を及ぼしている可能性が明らかになった (重相関係数=0.416、補正重相関係数=0.326、p値=0.030)。</p>	

